

3 花き類の植物成長調整剤

(1) さし木発根促進：オキシベロン液剤

使用目的	作物名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数
さし木の発根促進及び発生根数の増加	カーネーション	200～400倍 (5～2.5ml/水1L)	16～24時間さし穂基部浸漬	—	1回
		2倍(1000ml/水1L)	5秒さし穂基部浸漬又はさし穂100本当り10mlをさし穂基部に散布		
	きく	500～1000倍 (2～1ml/水1L)	3時間さし穂基部浸漬		
		2倍(1000ml/水1L)	10秒さし穂基部浸漬		
		100～200倍 (10～5ml/水1L)	5～10秒さし穂全体浸漬		
	花き類・観葉植物 (除カーネーション、きく及びチュールリップ)	2倍(1000ml/水1L)	5～10秒さし穂基部浸漬		
200～400倍 (5～2.5ml/水1L)		12～24時間さし穂基部浸漬			

<オキシベロン液剤を使用する場合の注意>

- ・他の農薬との混用は避ける。
- ・系統や品種により効果が認められない場合があるので注意する。
- ・適用作物群に属する作物またはその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効・薬害の有無を十分確認してから使用する。
- ・浸漬はさし穂基部2～3cmとし、所定時間浸漬する。
- ・さし穂は健全な親株からよく充実した枝を選び、葉付のさし穂は、さし穂の基部1/3にある葉を除き使用する。
- ・さし木後は十分にかん水する。さし床の湿度、温度は発根に大きく影響するので適切な管理をし、特にミストを併用するときは過湿にならないように注意する。

(2) さし木発根促進：ルートン

使用目的	作物名	使用方法	使用時期	使用回数
さし木(さし苗)時処理して発根を促進する。	花き(きく、ゼラニウム等)	1) さし木(さし苗)の基部を3cmぐらい水にひたしその部分にうすい層になって付着する程度に粉のまままぶす。 2) あるいは本剤を適量の水でペースト状にねってからさし木の切り口にぬりつける。日陰干で乾燥してからさす。この場合さし木(さし苗)にあまり多量に厚く塗布しないようにすること。上記の方法で処理しさしおわたら周囲に土をかけてよく固めておくこと。	—	—

(3) 開花時期調節

使用目的	作物名	農薬名	希釈倍数 使用量	使用時期	使用 回数	使用方法
開花抑制	きく	エスレル10	500～1000倍 (2～10ml/株)	摘芯時または定植後 1週間以内 及びその後10～14日毎	3回 以内	全面散布 (株全体 がぬれる 程度)
開花促進	ストック	ビビフルフロ アブル	1000倍 (100L/10a)	葉数10～14枚時とその 7～10日後	2回	茎葉散布

＜エスレル10を使用する場合の注意＞

- ・異常高温時の散布は薬害を生じる恐れがあるので、使用を避ける。
- ・散布直後の降雨は効果を減ずるので、天候を見極めてから散布する。万一散布後に降雨があった場合でも再散布はしない。
- ・一般作物にも微量で薬害を生じるので、周辺作物にかからないよう注意する。使用後の噴霧器などは十分洗浄する。
- ・本剤の効果は品種、気象条件等により差があり、また、使用時期、使用濃度を誤ると効果が出なかったり、品質の悪い切り花が出る。
- ・老化苗には使用しない。
- ・新品種に初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効・薬害を十分確認してから使用する。

＜ビビフルフロアブルを使用する場合の注意＞

- ・貯蔵中に分離することがあるので、使用に際しては容器をよく振る。
- ・ストックで使用する場合は、花芽分化の時期(10月頃)に高温にすると開花異常が引き起こされるおそれのある品種(アイアンチェリー等)では、この影響が助長されるおそれがあるため使用をさける。

(4) 鉢物・花壇苗(伸長抑制)：[ビーナイン顆粒水溶剤](#)

使用目的	作物名	希釈倍数 使用量	散布液量	使用時期	使用 回数	使用 方法
節間の 伸長抑制	きく (ポットマム) (施設栽培)	200～400倍	5～10ml/5号鉢	摘芯後10～7日 又は定植3日後 から発蕾初期	3回以内	茎葉 散布
	ポインセチア (施設栽培)	100～200倍	50～150L/10a	定植後3～30日	1回	
	ハイドラングア (施設栽培)	100～200倍	50～150L/10a	育苗期摘芯後 10～30日	2回以内	
				定植後3～30日	2回以内	
はばたん (施設栽培)	200～400倍	50～150L/10a	子葉展開後	2回以内		
			鉢上げ後	2回以内		

ビーナイン顆粒水溶剤（続き）

使用目的	作物名	希釈倍数 使用量	散布液量	使用時期	使用 回数	使用 方法
節間の 伸長抑制	ペチュニア (施設栽培)	100～200倍	50～150L/10a	定植後2週間目	1回	茎葉 散布
	ダミノジッドを含む農薬 の総使用回数 水溶剤4回 以内	200～400倍		鉢上げ後	4回以内	
	パンジー(施設栽培)	200～400倍	50～150L/10a	鉢上げ後	4回以内	

<ビーナイン顆粒水溶剤を使用する場合の注意>

- ・ 散布の際は、作物の生長点を中心に葉面散布する。
- ・ 銅製剤との混用および近接散布は薬害を起こすので避ける。銅製剤散布後の使用は1ヶ月以上の間隔をあける。
- ・ 散布に当たっては銅製剤を調製した容器、散布に用いた器具は十分洗浄してから使用する。
- ・ はぼたんについて以下のことを注意する。
 - (1) 子葉展開後から使用する場合、1回目はは種後10日目を、2回目はは種後20日目を目安に散布する。また3回目は鉢上げ3～5日後を、4回目は3回目処理の1週間後を目安に散布する。
 - (2) 使用時期が遅い場合には着色が遅延する場合があるので、適切な使用時期を逸さないよう注意する。
- ・ ペチュニアについて以下のことを注意する。
 - (1) 鉢上げ後に使用する場合、1回目は鉢上げ1週間後を目安に散布し、2回目以降は1～2週間程度の間隔で散布する。
 - (2) 着蕾期に使用すると花色が薄くなる場合や、花が小型化する場合があるので、着蕾期の使用はさける。
- ・ パンジーに使用する場合、1回目は鉢上げ後1週間後を目安に散布し、以後は1週間程度の間隔で散布する。

(5) 鉢物・花壇苗（伸長抑制・わい化・小型化）：スミセブンP液剤

使用目的	作物名	希釈倍数 使用量	散布液量	使用時期	使用 回数	使用 方法
節間の伸 長抑制 (わい化)	きく (ポットマム)	25～50倍	5～10ml/5号鉢 (原液0.1～0.2ml /5号鉢)	摘芯10日後頃	2回 以内	茎葉 散布
		50～100倍	50～100ml/5号鉢 (原液1ml/5号鉢)			土壌 かん注
	ポインセチア	15～25倍	5～10ml/5号鉢 (原液0.3～0.5ml /5号鉢)			茎葉 散布
茎葉の伸 長抑制に よる小型 化	アゲラタム	5～10倍	0.5ml/株	育苗期 本葉2～4 葉期	1回	茎葉 散布
	インパチェンス	10倍	2ml/株	鉢上後		
	金魚草	50倍	0.5～1ml/株	育苗期 本葉2～4 葉期		
	けいとう	25倍	0.5ml/株	葉期		

スミセブンP液剤（続き）

使用目的	作物名	希釈倍数 使用量	散布液量	使用時期	使用 回数	使用 方法
茎葉の伸 長抑制に よる小型 化	サルビア	12.5～25倍	0.5ml/株	育苗期 本葉2～4 葉期	1回	茎葉 散布
	パンジー	50～100倍	0.5ml/株			
	ヒペリカム (鉢栽培)	12.5～50倍	5～10ml/5号鉢	育苗期(萌芽10日 後、萌芽30日後及 び萌芽50日後)	3回	
	ゼラニウム	25～50倍	0.5～1ml/株	育苗期 本葉2～4 葉期	1回	
	日々草	50倍	0.5～1ml/株	定植後 本葉3～4 節時	2回	
	はぼたん	10倍	2ml/株	育苗期 本葉2～4 葉期及び鉢上後		
	ペチュニア	25～50倍	0.5～1ml/株	育苗期 本葉2～4 葉期	1回	
	まつばぼたん	12.5～25倍	0.5～2ml/株			
	マリーゴールド	10倍 5～10倍	0.5～2ml/株			
	シンフォリカル ポス (鉢栽培)	12.5～25倍	5～15ml/5号鉢	鉢上時(摘心時)、鉢 上後約20日及び鉢 上後約40日	3回	
節間の伸 長抑制 (わい化) および着 蕾数増加	つつじ類 (鉢栽培)	15～20倍	5～10ml/5号鉢 (原液0.3～0.5ml /5号鉢)	新梢伸長初期	2回 以内	

<スミセブンP液剤を使用する場合の注意>

- ・ 使用量に合わせ薬液を調整し、使いきる。
- ・ 他の薬剤との混用は避ける。
- ・ 本剤の伸長抑制効果は、作物の種類や品種、栽培条件、処理方法などによって異なるが、一般に使用薬量が多いほど効果が高くなる傾向があるので、希望する抑制程度に合わせて所定範囲内で決める。
- ・ きく（ポットマム）、ポインセチア、つつじ類に使用する場合は、使用薬量が多くなるほど開花時期が遅れる傾向があるので留意する。
- ・ アゲラタム、インパチェス、金魚草、けいとう、サルビア、ゼラニウム、日々草、パンジー、はぼたん、ペチュニア、まつばぼたん、マリーゴールドに使用する場合は、栽培条件や、使用時期などによって定植後の回復、開花率や開花時期、花径等への影響がでる場合があるので、留意する。
- ・ シンフォリカルポスに使用する場合は、散布後液溜まりとなった部分に一過性の黒変症状が観察される場合があるので留意する。
- ・ 茎葉散布の場合は植物体全体、とくに新葉部に均一にかかるように散布する。
- ・ 土壌かん注により処理する場合は所定量の水にうすめ、鉢土全体に均一にかん注する。土壌が過湿状態の時は使用をさける。